

機関番号：14503

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008年度～2010年度

課題番号：20530853

研究課題名（和文） 「市民性教育」としての「子どものための哲学」

研究課題名（英文） “Philosophy for Children” as “Citizenship Education”

研究代表者

森 秀樹 (HIDEKI MORI)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：00274027

研究成果の概要（和文）：

現在、様々な地域で市民性の教育の必要性が叫ばれ、それが実践に移されている。その背景には、グローバル化の進行による、社会制度、人間関係、自己のあり方の流動化がある。後期近代においては「再帰性」がより強まっており、それに対応することが求められるが、現代哲学が考察してきた「移行」に関する考察を「市民性教育」にも応用することができる。そこで、各地における「市民性教育」の諸実践の現状と課題を分析し、「市民性教育」の依拠する概念枠組みと方法論の再構築を行い、「子どものための哲学」を「市民性教育」として導入するための、日本の学校教育において実践可能なカリキュラムを開発した。

研究成果の概要（英文）：

In various countries, the necessity of “citizenship education” is maintained and it is really put into practice. In its background lie fluidizations of social systems, interpersonal relationships, and the art of self, which are caused by globalization. According to the analyses by sociologists, psychologists, and pedagogues, “reflexiveness” becomes stronger and stronger in “the late modern”. It is necessary for citizens to correspond to the “reflexiveness”. The problem of “transition” is however one of the main issues of modern philosophy, and the findings about it can be applied also to “citizenship education”. Analyzing current situations and issues of various practices of “citizenship education” in various places, we reconstructed a conceptual framework and a methodology that “citizenship education” can be based on. On the basis of the above-mentioned considerations, we developed a concrete curriculum of “philosophy for children” as “citizenship education”, which can be put into practice in Japanese class rooms.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：子どものための哲学・市民性教育・後期近代・再帰性・グローバル化

1. 研究開始当初の背景

現在、様々な地域で市民性の教育の必要

性が叫ばれ、それが実践に移されている。

その背景には、グローバル化の進行による、

社会制度、人間関係、自己のあり方の流動化がある。流動化に対応することの困難は社会的な諸課題からの「撤退」現象をひきおこし、そのことが社会問題となっている。それに対応するために、ヨーロッパを中心として新しい模索が行われている。

しかし、それらの活動をそのまま日本に「輸入」するわけにはいかない。そこには1) 教室での議論を社会での具体的な実践へとつなげていく仕組みの整備、2) 日本の学校教育が前提としている近代的な記述枠組みの再構築、3) 普遍的な認識を自分の生活につなげていく方法論の具体化などの課題が残されていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の初等・中等教育において、子どもたちに哲学することを教えること（「子どものための哲学」）を市民性教育の一環として活用するための条件を整備し、「子どものための哲学」を「市民性教育」として導入するための、具体的なカリキュラムを開発することである。

3. 研究の方法

(1) 後期近代に関する諸分析に依拠する「市民性教育」の課題の析出

ギデンズによれば、後期近代にあつては、知、関係性、自己は再帰的なものとなることを要求されるが、そのような要求は様々なアポリアを引き起こし、適応困難を引き起こしている。この問題を解決する鍵は、基礎的信頼と試行錯誤との間の「よい循環関係」を形成することにあるが、それこそが市民性教育の中核となる。ウィニコットによれば、基礎的信頼を形成するためには、環境と自己の間の協働という「奇蹟」が成就する経験を試行錯誤の中で積み重ねていくことが必要となるが、ノディングズは、いまや学校こそが、このような環境と自己の間の再帰的關係をケアする場所となるべきだと主張している。このような課題に取り組もうとするとき、教育内容もまた変貌することを迫られる。まず、知識を生活経験に根付かせつつも、そのようにしてえられた知識から生活へとフィードバックさせるという試行錯誤のプロセスそのものを主題化することが必要となる。そしてそれと同時に、そのような方法論を自覚化させ、子どもたちが自ら意識的に遂行できるようにするのでなくてはならない。市民性教育をこのように考えるならば、再帰性のあり方を主題的に取り扱ってきた哲学を体験させることは市民性教育の基盤としての役割を果たすことができる。

(2) 教育における「哲学的活動」の現状

と課題の分析

ただし、基本的信頼を育成し、再帰性に耐える自己を養うために哲学を用いる活動は、学校教育に限定しなければ、様々な仕方で行われてきた。そこで、次には、これらの哲学的活動を「市民性教育」という観点から相互に比較・検討することを通して、「市民性教育としての哲学」がどのような条件を満たす必要があるのかを考察した。

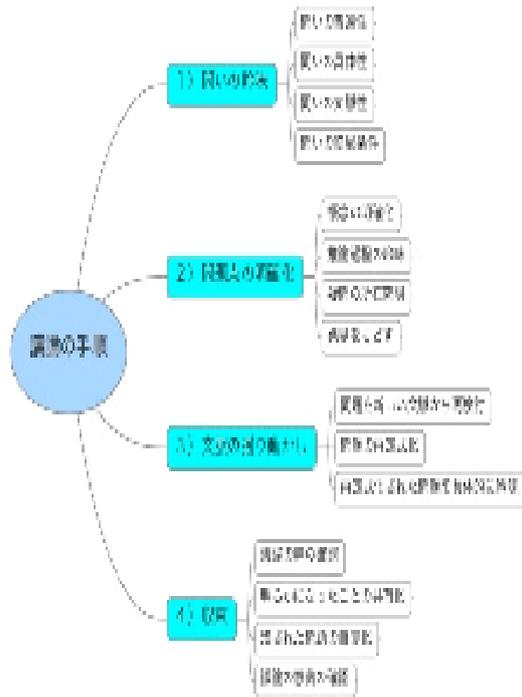
(3) 現代哲学における「移行」の概念の射程の検討

さらに、「市民性教育」の具体的なカリキュラムを考えるための準備として、現代社会における「移行」がいかなるものであるのかを解明した。まず、哲学の歴史を振り返ることで、「移行」がどのように考えられてきたのかを考察した。このような「移行」の概念は現代の哲学においても知のあり方の基本的な形態として再び注目を集めているが、このことは、現代において発生している「知の再帰性」という事態に対応したものであり、市民性教育において主題化されるべき再帰性の概念のモデルを提起している。そして、このような「移行」の概念は、知そのもののためではなく、全体としての生のためのものとして捉え直すことができる。すなわち、「知の再帰性」を経験することは「自己の再帰性」に対応することにつながる。その上で、「移行」の概念に基づくとき、社会のあり方とはどのようなものとして考えられるようになるのかを検討した。この社会像が「関係性の再帰性」に対処するものであり、グローバル化した社会における「市民性教育」において主題化されるべきものである。

(4) 「市民性教育」の現状と課題の分析

「市民性教育」としての「子どものための哲学」の具体的なカリキュラムを開発するにあたって、まず、「市民性教育」がこれまでどのような「理念」のもと実施され、どのような問題を抱えてきたのかを確認するとともに、その問題意識を明確化した。「市民性教育」は国民国家の枠組みの中での「民主的公民」を育成するという理念のもと遂行されてきたが、グローバル化の進行の中で、「市民」や「知識」の概念はゆらぎを迎えていた。このような状況に対して、様々な試行錯誤が行われているのが現状であるが、「新しい市民性教育」の概念枠組み、方法論、実践への橋渡しなどが課題となっている。そこで、この問題意識に対応するために、従来の「市民性教育」が依拠してきた（例えば、私と公の対比にみられるような）概念枠組みの再構築

と、教室の中での議論を自分の置かれた現実の状況に接続していくための方法論の明確化を行った。すなわち、「子どものための哲学」の着想に基づいて、1)「自由」などの主題について議論する中で、自己と共同体の絡み合いを具体的に体験させるとともに、2)議論の方法を反復的に学ぶことが、3)共同体への実際の参画に先立つモデルとしての役割を果たすという方策を検討し、以下のように「子どものための哲学」の進め方を明確にした。



4. 研究成果

以上の考察において示された概念枠組みと方法論に基づいて、日本の初等・中等教育において、「子どものための哲学」を「市民性教育」として導入する際の具体的なカリキュラムを開発し、総合的な学習の時間などで利用可能な授業案を作成した。

1) 自己について

授業 1：他の人の意見を大切にすることは
 どのようなことか？

授業 2：自由とは何か？

授業 3：〈自分〉と「自由」の関係

2) 共同体について

授業 4：自由を実現するためには？

授業 5：能力主義と平等主義

授業 6：私を支えているもの

3) 共同体への参画

授業 7：共有地の悲劇

授業 8：規則を考える

授業 9：哲学のレッスン

そして、授業案を含む、上記研究成果を兵庫教育大学学術情報リポジトリにおいて公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

- ① 加藤圭司・松本伸示「科学観ならびに科学に対する情意の変容から見た学習者と科学との関係性について—中学校理科学習における実態から見た評価スキームの検討—」『理科教育学研究』(日本理科教育学会)、Vol. 51 (No. 3)、2011、pp. 59-73。
- ② 森秀樹「哲学的「移行」と「新しい公共性」—グローバル化時代の市民性教育としての「子どものための哲学」(3)—」『兵庫教育大学研究紀要』(兵庫教育大学紀要編集委員会)、第 37 巻、2010、pp. 89-102。
- ③ 澤田千歳・松本伸示「『課題設定の能力』の育成を目指した実践研究—『子どものための哲学』の授業を通して—」日本総合学習学会編、日本総合学習学会誌、第 12 号、2009、pp. 1-8。
- ④ 森秀樹「再帰的近代のアポリアと市民性教育の課題—グローバル化時代の市民性教育としての「子どものための哲学」(1)—」『兵庫教育大学研究紀要』(兵庫教育大学紀要編集委員会)、第 35 巻、2009、pp. 89-102。
- ⑤ 加藤圭司・松本伸示「言語と行為の質的変容からとらえる学習者の文化的発達の実態」、『日本理科教育学会全国大会発表論文集』(日本理科教育学会第 59 回全国大会)、第 7 号、2009、p127。
- ⑥ 加藤圭司・松本伸示「文化的発達の視点からとらえる学習者の科学概念構築と科学観(その 2)—科学との関係性の変化に着目して—」『日本教科教育学会全国大会論文集』(日本教科教育学会第 35 回全国大会)、第 35 号、2009、pp95-96。

〔学会発表〕(計 2 件)

- ① 加藤圭司・松本伸示「文化的発達の視点からとらえる学習者の科学概念構築と科学観(その 2)—科学との関係性の変化に着目して—」、日本教科教育学会第 35 回全国大会、2009 年 10 月 10 日、金沢大学。
- ② 加藤圭司・松本伸示「言語と行為の質的変容からとらえる学習者の文化的発達の実態」日本理科教育学会第 59 回全国大会、2009 年 8 月 18 日、宮城教育大学。

〔図書〕(計1件)

- ① 森秀樹「哲学的活動による基本的信頼の育成—グローバル化時代の市民性教育としての「子どものための哲学」(2)—」『社会系諸科学の探究』(法律文化社)、2010、pp. 74-88。

〔その他〕

- ① 森秀樹『「市民性教育」としての「子どものための哲学」』(科学研究費補助金研究成果報告書) 2011、pp. 1-124。、兵庫教育大学学術情報リポジトリにおいて公開(<http://hdl.handle.net/10132/3742>)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 秀樹 (HIDEKI MORI)
兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号：00274027

(2) 研究分担者

松本 伸示 (SHINJI MATSUMOTO)
兵庫教育大学 学校教育研究科 教授
研究者番号：70165893